

## グロ・クエスト

——島根県大田市の小正月における歳徳神の姿を考える——

村山和之\*

### **Guro Quest - Considering the Appearance of Toshitokushin in the Lunar New Year (Koshogatsu) in Oda City, Shimane Prefecture, Japan**

**MURAYAMA Kazuyuki**

Oura area, in Isotake-cho, Oda City, Shimane Prefecture, a fishing port comprising 696 people as of Feb 2023, is widely known in Japan as the setting for the annual event 'Isotake no Guro', which begins on 11 January and ends on 15 January, the Lunar New Year's Day called Koshogatsu. Guro is a temporary hut made of bamboo poles, bamboo grass, and pine trees, with a seat inside. The local people gather around a fire and share rice cakes and dried squid roe with other local people to pray for a good catch and good health inside. On the morning of the 15th, Guro is dismantled, and the useful materials are removed and burnt.

In the new Corona disaster, Guro did not build for Koshogatsu of 2021-23 due to their own nature. As a caged hut, it is inevitable that people will congregate within the Guro. There can be no Guro without conversation, food and drink.

This report is based on my visits and stays in Oura area during the Koshogatsu period and on other occasions during the three years when Guro did not build.

It consists of a number of small studies, all of which focus on the main deity, the 'Toshitokushin' or 'Toshitokujin', who comes as a substitute for Guro.

This research is part of the project "Basic Research on the Idea of Asian Conviviality" (Representative: Prof. Shunji Hosaka) funded by the Institute for Policy and Cultural Studies, Chuo University.

キーワード：島根県民俗，五十猛のグロ，歳徳神，小正月行事，トンド

Key Words：Folklore, Shimane-pref., Isotake no Guro, Lunar New Year, Tondo

---

\* 中央大学政策文化総合研究所客員研究員

Visiting Research Fellow, The Institute of Policy and Cultural Studies, Chuo University

## はじめに

島根県大田市五十猛町<sup>1)</sup>大浦地区は、2月1日現在、104歳の吉川刀自を最長寿に696人からなる漁港である。

大浦地区は、小正月の1月11日から始まり15日に終了する年中行事「五十猛のグロ」の舞台として国内で広く知られている。

竹と笹で作ったグロと呼ばれる小屋を、歳徳神を迎え入れる祭場とし、地域住民がその中で、囲炉裏の火を囲んで餅やスルメ等を共食しながら、大漁や無病息災を祈願する「お籠り」行事が「五十猛のグロ」である。(写真1)

15日の朝にはグロを解体し、有用な資材を除いて、住民たちがグロの傍らに置き去っていった注連縄や古札をはじめとする正月飾りとともに燃やす。トンド焼・左義長としての機能を発揮するグロのもう一つの顔がある。

新型コロナ禍において、グロは自らの本質が災いして、2021～23年の小正月に立つことはなかった。お籠り小屋である以上、人々がグロ内に集合することは必定。会話や飲食を伴わないグロはありえない。当然のこととして「三密を避けましょう」という感染予防スローガンに対する挑戦となってしまう。

島根県においては、新型コロナの感染者が全国に比して著しく少なかったこともあり、徒らに感染者増加の原因となりうるグロ行事の中止は、妥当な決断であった。ただし、役



写真1 五十猛のグロ (2019年)



写真2 大浦の簡易グロ (2023年)

目を終えた正月飾りを誰もが「燃えるゴミ」として自ら処理しにくかったためか、本来グロが立つべき場所の近くに簡易的な集積場を作り、焚き上げ行為だけは15日朝に毎年行っていた。（写真2）

本稿は、グロの立たなかった3年間、大浦地区を小正月期間その他の折に訪問・滞在し、グロに関して住民に尋ね、関係場所を訪ね考えた記録である。

いくつかの小考察から構成されるが、どの考察もグロを依り代として到来する主祭神である「歳徳神」、大浦の言葉で「トシトコサン」とは何かを集約される性格のものである。

大浦におけるトシトコサンをめぐる認識から始め、五十猛町の神社と歳徳神とグロの関係、近隣の歳徳祭とトンド祭との関係について本稿中では整理し、2024年には再開されるグロに間に合うように、中間レポートとしたい。

なお本研究は、中央大学政策文化総合研究所のプロジェクト「アジア的共生思想の基礎研究」（代表：保坂俊司）の最終年度の研究資金を得て実施したものである。

## 1. グロの祭神トシトコサン（歳徳神）とは何者か

人は死んでも肉体は滅ぶけれど、魂は死霊となって滅びないというのは、日本人共通の観念であろう。

大田市喜多八幡宮宮司で民俗学者である白石昭臣（1935-2004）が述べる<sup>2)</sup>、「何度かの儀礼を経て死霊は浄められ、祖霊となって近くの山の頂上の方へ、または海の彼方の方へ行ってそこに留まる。やがて他の神霊と合体して子孫や村々を見守るという観念」は、神道の神話・伝説とは相いれないかもしれないが、太古からの日本人のもつ祖先神観に違いない。

祖先神は一年の節ごとに、「子孫の家を訪れ、祀られ、帰される」を繰り返す。帰される先は彼らの常留する山中や海中の彼方の世界である。

白石はこれを歳徳神であるとは述べていないが、子孫や村々の共同体を見守り祝福してくれる性格を有する点は、歳徳神の機能と一致している。

仏教民俗学者の五来重（1908-1993）も、歳徳神をめぐる考察で、正月の神様は自分たちにとって身近で親しみのもてる神様であるからこそ、待ち焦がれられたのであり、それは祖先神であり断じて猛々しい神話の神々ではありえない、と指摘している。

大浦在住の松尾岩市氏（96歳）は（写真3）、1月11日のグロ行事のことを「歳徳祭（とすとくさい）」と呼ぶ。年中行事としての歳徳祭の日には、グロ、餅、船祝いがかせなかつた、とても楽しみな祭典だったと語る。歳徳神を祀る歳徳祭を成立させる三大要素の一つがグロだったということであり、他の二要素も歳徳祭には必須要素だったのだ。グ



写真3 松尾岩市氏

ロと歳徳神だけを一对一の対応だけで結びつけてはいけなかったのだ。歳徳祭は、韓神新羅神社（からかみしらぎじんじゃ）の親社である五十猛神社で同時期に、同名の祭事が行われている。

大浦地区において、グロで迎えるトシトコサンはどこから来ると思いますか？ と年配の住民を中心に認識を尋ねてきたが、返答は概ね「山・海・わからない」に大別された。興味深いのは、グロの立つ海岸の丘上にたつ韓神新羅神社や船玉神社、金毘羅神社など、大浦地区内の神社名を答えた人は誰もいなかったことだ。

韓神新羅神社は、明神や大浦神社とも呼ばれ、大浦地区の氏神的存在であり、五十猛町湊地区の五十猛神社から分かれた神社である。祀られているのはスサノオノミコトである。（写真4）

もしも、スサノオノミコトがグロに依りつき、グロ内で子孫の住民たちと共に過ごし、祭典を経て、もと来た場所へ帰される歳徳神だとしたら、大きな疑問が湧いてくる。

本来、年中行事であるグロには、宮司を伴う神事・儀礼は見られないのだ。グロは祭りではなく神事だ、という人もいるが、そこは「神社と直結する神事ではなく、トシトコサンという神を祀る行事」の意味で神事と言っているに違いない。



写真4 韓神新羅神社

トシトコサンを迎える信号だけでよいならば、トシトコサンの依り代としてセンボクサンと呼ばれる大竹を二本直立させてグロを作るだけでよい。

トシトコサンが坐る目印ならば、「奉 歳徳祭」と書かれた五十猛神社のお札をグロ内でセンボクサンに貼り付けばよい。

トシトコサンが坐す場の清浄性が求められるなら、潮草としてジンボウサ（ほんだわら）をお札の傍に供え、センボクサンの根元に浜の砂を敷き、汲んできた潮水を撒けばよい。

トシトコサンを送り出すだけならば、14日の夜にグロ内にしつらえた祭壇に鏡餅をはじめとする供物を用意し、サイテン（祭典）儀礼を大浦グロ保存会の担当世話人組の組頭と会計二人が行い、鏡餅をグロの丁場（囲炉裏）の火で焼いて共食する直会をもって終了するだけでよい、と推察できるからだ。

スサノオノミコトがトシトコサンだとしたら、韓神新羅神社が、その宮司や氏子衆が、より宗教的にグロに関わってきてもおかしくはない。スサノオノミコトといえば大神中の大神である。仮にグロに来てもらうとして、どれだけ大掛かりな工程が必要になるのか。

スサノオノミコトが歳徳神でないなら、船玉様や、金毘羅様、五十猛神社に祀られるスサノオノミコトの息子イタケルノミコトがトシトコサンなのかということ、その根拠は著しく乏しいものとなる。グロと神域との間には以下の如く関連性が指摘できないのである。

現在大浦地区において、唯一のグロが立つ場所を韓神新羅神社の下の海辺ということで「宮の下」と呼んでいる。当然、そこは神社の境内ではなく、港の画である。

昭和20年代中旬まで大浦地区にはグロは4軒立っていた。韓神新羅神社の鳥居の手前のグロを「明神さん」と呼んでいた。少し離れた柳町の金毘羅神宮小祠の裏にも「金毘羅さん」と呼ばれたグロが立っていた。

神社の規模の大小こそあれ、いずれも境内の外にグロは建てられた。昨今、神社境内内で左義長やトンド祭を行い、神職が率先して行事を執行している事例が見受けられるが、グロはどの寺社とも祠や堂とも関係が見られないのである。

したがって、ここでは次の3点を論点として提示しておきたい。

1. グロに来訪するトシトコサン（歳徳神）は、近隣の山や海からやってくるという認識にある。大浦地区には歳徳神を祀る個別の社は存在しない。

2. グロに来訪する神がスサノオノミコトをはじめとする記紀神話上の神格であるとは考えにくい。柳田国男～五来重～白石昭臣が唱える祖霊神が歳徳神の実体であろう。

3. グロを含む大浦の歳徳祭は、地元の神社と結びついた神道的な儀礼を必ずしも必要としない。

以上に加えて、グロには、その清浄なる内部において歳徳神から新しい聖なる神力（ア



地図 大田市の歳徳祭実施地

ラミタマ、新御魂)の一部を賜り、無病息災を得ることから、伝統的な「年籠り」の構造と機能が明らかに見うけられる。

記紀神話と関係ない民間神としての歳徳神の性格・特徴をより明確にするためにも、人と神とが交流する祭場としてのグロの特徴をより詳しく考えていかねばならない。

## 2. 近隣の歳徳祭・トンド祭

さて小正月において歳徳神を迎える祭は全国規模で散見されており、どれもが在地の流儀や伝統に従って、小屋状のものを竹や樹木で紡錘上に作り、正月飾りやダルマ、書初め等を焚き上げ、その火で餅や団子を焼いて食べ、無病息災を祈願するのを常としている。

ここでは、大田市の中で歳徳祭やトンド祭を執り行っていた三か所の事例を紹介し、五十猛のグロとの比較の情報としたい。

一件目は大浦地区より1キロ半ほど東に位置し、JR山陰本線の五十猛駅周辺を中心とする五十猛町湊(みなと)地区の五十猛神社の歳徳祭、二件目は五十猛駅から上り列車に乗って大田市駅に向かって次駅となる静間のセンボコサン、そして五十猛駅下り列車が次に停まる駅：仁万(にま)からさらに南西に向かって自動車で20分ほど走った中山間地に位置する仁摩町大國の冠(かむり)地区のトンド祭りを三件目に扱う。



写真5 五十猛神社

### 2-1. 五十猛神社の歳徳祭

五十猛神社は、創立が925年（延長3）とされる古社である。1848年に再建された本殿、1980年に改築された拝殿を有する。主祭神はスサノオノミコトの息子である五十猛命（イタケルノカミ、イソタケルノミコト）である。この神社は五十猛町の神社の中で中心的な位置を占めており、大浦地区の韓神新羅神社の親社にあたる。（写真5）

五十猛神社に隣接した東の空き地・駐車場にセンボクサンと呼ばれる仮小屋が建てられ、神社内で神主に導かれての神事に氏子たちが集い、五穀豊穡・家内安全を祈願する歳徳祭が2023年1月14日に執り行われた。

五十猛町湊地区はJR山陰本線五十猛駅周辺の湊1・湊2・湊3の自治会からなり、2023年1月31日現在の総人口は200人である。

本年度の歳徳祭の当番は湊1の自治会（会長：田中安夫氏）が担当した。また本年度は、こちらでもコロナ禍の影響は大きく、従来よりも規模を縮小して行われ、餅つき等の人が集まって行い、飲み食いを伴う行事も行われなかった。

午後1時半からおよそ20分強の神事は、湊地区3自治会全てから数人ずつの参集を得て、拝殿（玉串拝礼）（写真6）～センボクサン～拝殿の順に移動して滞りなく終了した。



写真6 歳徳祭の供物



写真7 センボクサン



写真8 センボクサン正面内部

宮司さん・大夫さんと呼ばれる林隆則氏（医師）が一人で先導する。（写真7、写真9）

この後は、お下がり餅と呼ばれる供物の鏡餅を分割して、担当した自治会員の家へ会長の田中氏が一軒一軒配った。正月飾りなどとともに焼き上げるのは翌15日であるが、今回は時間が許さず見ることはできなかった。

センボクサンとはグロに相当する歳徳祭特有の装置である。竹と箆で作り上げ、中央に高さ15メートルほどの親竹（オヤダケ）と呼ばれる孟宗竹を直立させ、直径4メートル弱の同心円を床として、14本の葉がついたままの細竹を紡錘状に立てかけ親竹と結ぶ。この装置の建造は、他のどこの場所とも変わらず、男性のみの仕事による。

親竹は通常は3本を一組として用いてきたが、コロナ禍での規模縮小から、本年度は1本の竹からなっていた。焼き上げの際には、親竹は外されて、希望者に引き取られる。

入り口の2本の竹には松の枝を縛り付けて門松状とする。入り口は毎年、恵方を示しており、2023年度は南南東微南であった。恵方とは歳徳神のいる方角である。

床となる部分には箆が敷かれてあり、親竹には「奉 令和五年歳徳祭」と書かれた紙木札と紙垂が紐で結ばれてある。その箆の上に正月飾りや注連縄などが箱や袋に入れられたまま、或いはそのままの姿で納められ、翌日の焼き上げを待っている。（写真8）

この中で興味深かったものが、竹筒と竹柄杓である。色と状態から判断しても、使い古されたものであろう。センボクサンに納めて、正月飾りや注連縄とともに焼き上げてもら





写真9 宮司：林隆則氏と氏子衆

いたいのだから、それらと同様に、自分の手では処分したくない呪物の類に属するものであろう。

潮汲みの際に用いた竹筒や竹柄杓であると思われるが、12月31日の朝潮汲みに使ったものか、忌明けの潔斎の潮汲みに使ったものか、尋ねる機会を逃してしまったことが悔やまれた。

田中氏の話では、子供時代には、センボクサンの中に入って遊んだこともあるという。グロの昔の写真を（昭和30年代初期）見ると、建物の基本的構造はセンボクサンと大差はない。昔から構造が変わっていないとすれば、五十猛神社の歳徳祭で建てられるセンボクサンの特徴は、内部に入れるよう作られていることだといえよう。多くのトンドや左義長が、その内部に人間が入り出すようには作られていないことから推察するに、このセンボクサンには、グロと通じる、お籠り施設としての仮屋の痕跡が見うけられ、大変興味深い。（写真10）

ただし、内部に囲炉裏を設けて歳徳神のいる場所で共食し、幸福を祈願するグロにおける歳徳祭の様式は、現在の五十猛神社の歳徳祭の装置：センボクサンには見られない。

五十猛神社の歳徳祭は、五十猛神社の主祭神である五十猛命に対する祭典ではない。しかし、神道のスタイルで神話上には現れない民間神である歳徳神を祀ることに何も問題は生じていない。湊地区の住民全体の歳徳神祭を、地元の氏神である五十猛神社で行うことで、洗練された神事の体系の中に位置づけたことは、氏子たちが自ら選択し確立し継承してきた慣例なのだと思う。

一方で、大浦地区の歳徳祭では、韓神新羅神社の氏子たちが神社の拝殿に参列することはないし、神主による祭典も儀礼も行われず、餅やスルメなど神棚にあげる供物にあた



写真 10 センボクサン正面内部 (2019 年)

る食品は、住民が自ら持参し、グロに入ることで歳徳神に相対し、神が召し上がった後のお下がりとして持参した餅やスルメをその場で焼いて食べる。それによって歳徳神から祝福の呪力を体内にいただく。こうして新たな一年を健康に生きられるパワーを授けられてグロを出てゆくのだ。

これはすなわち年籠りに相当する。聖地・清浄な地で清らかな一夜を送り、心身を清めて祖先のミタマ（御魂）の一部をアラタマとして自らの体に頒けていただく年中行事が、アラタマの年始めとしてあった。アラタマとは歳神（歳徳神）から授かる新しい魂の意味である。本来正月とは清浄地で年籠りして先祖のアラタマをいただく祭りなのである<sup>3)</sup>。

五十猛町内の二つの神社と二つの歳徳祭——センボクサンとグロ——の比較考察は、今後も最も続けてゆかねばならない課題の一つとなっている。

## 2-2. 静間町仮屋のセンボコサン

大田市静間町は、大田市市街地（大田）の西部に位置し、三瓶川が静間川と水を合わせて日本海へ注ぐ河口と、大田市最大の漁港：和江（わえ）を擁する地であり、漁業と農業を基に水産加工業も盛んである。大国主命と少彦名命の二神が、国造りの策を練った洞窟と伝わる静之窟（しずのいわや）が海岸部にみられる。2023年1月現在の人口は1258人である。

2019年1月14日、我々は、静間町の入り口にあたる仮屋地区を五十猛のグロに向けて走行中、静間川にかかる橋を過ぎ、川と山陰道に挟まれた水田に立つトンド、その周囲に群がる人々を見かけて息を呑んだ。

これは見なくてはいけないものだ、でも駐車場など見当たらないし、そもそも地元の人

たちの内輪の行事に、行きずりの余所者が許可もなしに乗り込んでゆくのは無礼すぎる。

（写真11）

しかし、逸る気持ちをおさえられず、橋を渡ったところに車を置き、橋を渡ってトンドの方へと歩いて向かった。ときはまさに、いざトンドに点火しようというタイミングであり、川土手の道に向かってゆく我々は、全員から「何事か、何者か」と注視された。当然である。

「すみません、通りすがりの者ですが、こちらを見せていただいてよろしいでしょうか？」と恐る恐る大声で挨拶すると、幸運にも呼び寄せて下さり、静間町自治会のご厚意で行事を見学することができた。

西に開いたトンドの門に向かって祈りを捧げ、全員で拍手を打った後に点火する。（写真12）炎はみるみるうちに燃え上がり、青竹が破裂する爆竹音が響く。（写真13）こうして焚き上げが終わり、隣接する仮屋生活改善センターでの直会にも混ぜていただき、お話を伺うことができた。この場所の字名を仮屋（かりや）という。仮屋で仮屋（トンド）焚き上げが行われていたのだ。

自治会長の竹下伸治氏、静間町出身の市長：楳野弘和氏をはじめ、席を近くする皆さん

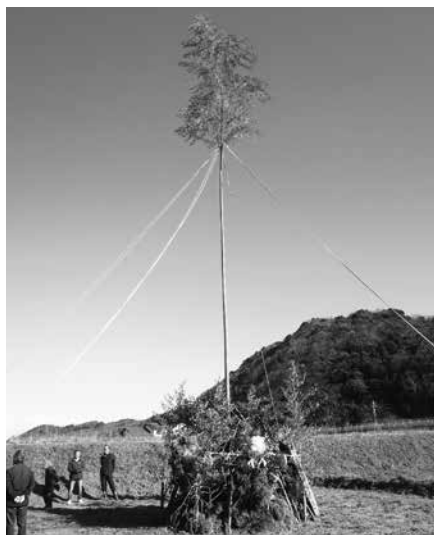


写真11 仮屋のセンボコさん



写真12 点火前の礼拝



写真13 センボコさんの焼き上げ  
(撮影：上原美奈子)

が教えて下さる。この「グロを組んでトンドサン」を行う行事を「トンド祭」という。

1月4日から8日の期間にトンドサンを組み上げること。1月第2日曜に火入れをすること。火が落ち着いてきたら焼き芋をすること。トンドサンの装置を「センボコサン」と呼ぶこと。

センボコサンは、高さ15メートルほどの孟宗竹(先の枝はついている)を中央に立て、その周囲5メートル四方に竹をつけた四本の杭を打ち、杉をはじめとする木の枝を密集させて立てかけ、積み上げてある。まさに「グロ(木や薪を積んだもの、田の側に木、笹などの密生した所)」<sup>4)</sup>(写真14)である。

西に入り口というか門松を設置し、全体を守るように紙垂をつけた注連縄で括ってある。焼き上げたい正月飾りらしきものが入った紙袋や箱が、上部に積まれている。お神酒、スルメ、米などの供物は離れた卓に置かれていた。

このトンド祭は、絶えていた祭を、昭和61年に、会館と呼ぶ仮屋生活改善センターが建てられたときに復活させたとのこと。



写真14 センボコさんの正面

静間町の中でも漁村の和江と農村で鉾山があった静間とは生活文化や方言にも違いがあること等、興味深い話を、大変おいしい地元産の蒲鉾と手作りの豚汁を肴に、気持ちよく勧めて下さる昼酒とともにいただく。（写真15）



写真15 直会の御馳走（撮影：上原美奈子）

この状況下での聞き取りは、酔いも手伝って、大切なことを聞き洩らしたり、ノートに書きつけた文字が後になって読めなかったり

で、反省も大きいのだが、何よりも行きずりの旅人を迎えて下さる客人歓待の良風に驚き感激した。

2020年にも同時期に同所を訪れてみたが、センボクさんの焼き跡が見られたので、すでにトンド祭は終了してしまったことがわかった。まさに一期一会であったのだ。

この静間町自治会のトンド祭で組み上げられるセンボコさんは、竹や木の密集した部分を切り取って人間界に運んできたような形であり、グロの本義の一つを具現化している意味で重要な事例だ。

また、門松のような入り口を設けていることは、象徴的に神を意識する方角を定めていることになる。この入り口を出入りすることはできないし、内室の存在も確認できなかった。お籠り用の仮屋の機能は、実際には失われてしまっていることになる。

しかし、木材を組んで扉と見える部分を形だけでも作っていることは、一度絶えてしまったセンボコさんの伝統を復活させるときに、年輩の方々の呼び起こした記憶のイメージの中にかかしら入り口の存在があったからに違いない。出入り口は方角を示す指針にもなるから、恵方を表すときにも必要となろう。今後も静間のセンボコサンの変容の経過を意識してゆきたい。

### 2-3. 仁摩町大国「冠」地区のトンド祭り

仁摩町（にま）は、石見銀山と隣接する丘陵部と日本海を臨む琴ヶ浜と4港を擁する海岸部からなる。

2023年2月1日現在の総人口が3509人、大田市中央部に位置し、東の旧大田市、西の温泉津町（ゆのつ）と共に2005年から新制大田市<sup>5)</sup>となり現在に至る。

今回訪問した冠（かむり）地区が属する大字：大国（おおぐに）の総人口は351人、冠地区は23世帯で37人が住む<sup>6)</sup>。

立地は、仁万港へと注ぐ潮川（うしおがわ）に沿って河口から上の方（南方）へおよそ

4キロ上ると大国集落の中心地に至り、そこから潮川の橋を渡り、南西に冠川に沿って山間地をおよそ3キロ上った海拔150メートルほどの山間地にあたる。海拔こそ高くないが、冠川が削った峡谷の道路は狭く、思った以上に深山に分け入るような気分になる。

前日の14日、五十猛のグロの際にいつも助けて下さる五十猛歴史研究会の重鎮：林能伸氏が、滞在先の出雲市での用事を早く切り上げて、我々のために大田市に戻ってきて下さった。仁摩町の山中の冠地区でグロをやるので見に行かないかと誘って下さったのだ。

林氏は冠の山中にそびえる烏帽子岩（冠岩）の写真撮影に何度か訪問した経験もあり、トンド祭り主催者の知人もおられることから骨を折って下さり、前日の準備を見ることができた。小雨が降る山道を走って最後のハンドルを右に切ると、霧の中から道に面した作業小屋が二軒並び、そのわずか先の畑中にトンドが姿を見せる。

すでにトンドの組み立ては終了しており、小屋の中では作業を終えた8人の男性たちが寛いでおられた。林氏が挨拶して私を紹介する。私も自己紹介して、訪問の目的を告げ、明日の見学が可能なら許可をいただきたいとお願いした。ただこの時点では、15日の調査予定の調整が難しそうで、正直訪問は無理ではないかとも思っていた。

ところが準備時点のビデオや写真を見て「ぜひ行くべきである」と強く勧めてくれる撮影と運転で常に協力してくれる茶文化研究者の上原美奈子氏、自分も見たことがあるので自信をもって勧められると最新情報を下さった2018年以来お世話になっている大田市観光協会の大住かな子氏、この二人の後押しを受けて訪問を決断した私は興奮を抑えられなかった。

翌15日は雨が上がってほっと胸をなでおろす。トンド祭りが開かれる冠地区の紙屋橋へは、昨日と同じ経路をたどり、橋のおよそ500m手前の「矢筈城跡・冠地区」と書かれた観光看板がある分岐点の駐車スペースから、冠川を左手に見下ろしながら徒歩7分ほどの距離である。紙屋橋までは乗用車でも行ける道路ではあるが、祭りで、誰もが車で乗り付ける場所なので、すれ違いや駐車、回頭に難が生じると考えて大事をとり、私たちは歩いて紙屋橋へと急いだ。（写真16）

この日は朝8時から餅つき、10時からトンド祭り、その後はぜんざいがふるまわれるという。我々は、携帯電話で訪問の旨を伝え、9時20分ごろ会場へ到着した。小屋には「令和5年 冠とんど祭り」と白地に黒書きされたバナーが取り付けられ、小屋の外では餅つきが行われていた。杵と臼で人力とで、この地で取れた米で餅をついている。（写真17）

お祝いのお酒とお菓子を、酒は私から男性に、菓子は上原から女性に、それぞれ手渡す。

作業小屋は山手の田畑を背にほぼ東面して3棟並んでいる。大が2棟に小が1棟で、屋



写真 16 紙屋橋作業場を望む，遠くに冠岩，中央左にトンネル（撮影：上原美奈子）



写真 17 餅つき，地元の水で育ったもち米で（撮影：上原美奈子）

根と壁はトタン張りである。道路に面し，目前には常設のいなはで（稲架），冠川を跨いで対岸には棚田が広がる。紙屋橋の上の畑にたつトンネルまではそこから南へ徒歩2分である。

南西の山上には烏帽子岩または冠岩と呼ばれる高さ16メートルほどの岩が見える。ここは神の在所であった聖岩である。昔，この岩の神光が眩しいので下りていただき，冠神社に祀ったという。この神をアキクイウシノミコト（飽昨之宇斯能命）という。イザナギ

が黄泉の国から戻って禊をしたときに、ほうり捨てた冠から生まれた神である。冠岩の由来であろう。

さて、10時に始まるトンド祭りの前に、昨日聞いた情報を反芻する。

まず、このトンド祭りは冠集落主催の行事であること、主体となって活動するのが冠共栄会のメンバーであること、そしてこのトンド祭りは今から30年くらい前に復活された行事であること、子供のころから親しんできた年中行事ではなかったのだ！

現在70～80代の冠共栄会のメンバーたちがまだ働き盛りの頃、同じく70～80代であった彼らのおじいさんたちに「お前ら若いもんがやれ！」と、復活するようにいわれて始めた行事だという。

冠共栄会がまだ青年団だった頃、全く経験のないメンバーたちで、古老の記憶を基に復活していったのだという。その当手を振り返って、トンド祭りで大夫さんを務める黒瀬雅實氏（80歳）はこう教えてくれた。

「昔は、トンドは飾り小屋だったのです」

飾り小屋とは、要するに五十猛のグロのような形態をもつ仮屋である。トンドを15メートルほどの竹をゴシンボクとして中心に立て、箆で屋根をふき、壁をめぐらしたのが飾り小屋だという。内部では囲炉裏で火をたき、餅を焼いて食べた。若者衆はそれに加えて酒を飲み、若い男女の公然の出会いの場としても大事であったという。

まさに知りたかった情報である！飾り小屋は、拙稿『グロ・ノート』でも言及した<sup>7)</sup>、仁摩町の古文書や昔語りによく表れる歳徳祭の祭場に特有な名称である。1856年（安政三年）に現在の仁摩町地域を構成する、宅野村・仁万村・天河内村・大国村・馬路村による五か村寄合で申し合わされた事項の中に、五十猛村と隣接する宅野村で飾り小屋が行われていたことが記されている。ここでは左義長の際に壮年の男の太鼓などを用いた大騒ぎをやめるべきとされ、飾り小屋ならば節度をわきまえてそれぞれの村でやってよい、とある。それでも、壮年が太鼓を叩いて騒ぐことは禁止すべきだ、とされている。

さらに、1870年（明治3）の申し渡しでは、左義長は一切禁止、子供でも太鼓叩きは禁止、歳徳祭も中止となってしまふ。左義長と歳徳祭が、ここでは個別事項としてとらえられているようにはうかがわれるし、歳徳祭が飾り小屋を伴うものである以上、飾り小屋もこの時代に中止させられたと推察できる。

時代はさらに下って、1987年に発行された『かたりつぎ——仁摩町ふるさと伝承記録——』<sup>8)</sup>には、飾り小屋を記憶している人の語りが「神木さん（孟宗竹）を中心にして竹で飾り小屋を建てて、お正月のお供物やお正月飾りを一緒にして小屋に火をつけて燃やし、その火で餅を焼いて食べるのが習わしでした」と紹介されている。

こちらのインフォーマントの年齢と出身は記されていないが、明治3年に中止を余儀な



くされた飾り小屋≒歳徳祭が、村単位であったか、集落単位であったかは詳らかではないが、明らかにどこかで復活してインフォーマントの記憶に宿り続けたことは事実であろう。そしてここで記されている飾り小屋は、お籠りの機能をもたないことがわかる。詳細について話さなかったかもしれない。お正月飾りなどの呪物も歳徳神に預け燃やして送り返し、そのアラミタマたるご利益は、焚き上げの炎で焼いた餅を通して授けられる。

冠の飾り小屋とて、今はなき古老たちの昔語りで生き残り、その実態を知らない共栄会の青年団によってトンド祭りとして生き返ってきたのである。

現在のトンドは、ゴシンボクと呼ぶ15メートルほどの孟宗竹を中央に直立させて据え、その底辺を220×220cmの四角錐を作るように四本の真竹を組み合わせてゴシンボクと一点で結びかけて骨組みとする。ゴシンボクも四本の竹も葉がついたままであり、ゴシンボクには根がついていない。(写真18)

さらに地面から4～50mそして120～30cmの高さのところに、下段は220cm×4本、上段には160cm×4本の竹で、底辺に平行に枠を四面に取り付けて外装が完成する。最上部の三角錐空間は紙垂をつけた縄が張りめぐらされる。

こうしてできた内部のスペースには蕎麦や杉などの燃えやすい枯れ枝や枯葉を詰め込み、一番外側、つまり外から見えている四面の外壁部分は、真っ青な葉がついた竹や笹などでぎっしり埋め尽くされる。外から一見すると、緑のこんもり繁ったピラミッドから五本の竹が生えているようにも見える。

内部の開いているスペースには、焚き上げをしたい正月飾りや書初めがもち込まれ、置かれたり掛けられたりして最後の時間を待っていた。構造上このトンドもお籠りはできない。(写真19)

開始の時間、10時を回ると太鼓が打ち鳴らされ、揃いの祭半纏を纏った冠共栄会の会員を先頭に・準会員・一般住民が会場に集結し、北面してトンドに対峙して整列する。トンド祭りの始まりだ。

トンドの正面には卓が設えられ、献納された日本酒、餅、米、ご祝儀が供えられる。やってくる一般住民は皆、当然のここのようにご祝儀袋を重ねてゆくので、私は心構えが足りないことに恥ずかしくなった。

宮司(大夫さん)を務める黒瀬氏の先導で祭典が始まり、祝詞が唱えられ、玉串拝礼が数人の代表によって行われた。その模様を撮影していた私もゲストとして玉串を捧げたが、その作法ができてないことに恥ずかしくなった。こうして一通りの祭典は全員で礼拝してしめやかに終わる。(写真20)

ついで焚き上げになるわけだが、トンドに油が撒かれ松明を擦りつけるようにして火を回してゆく。内部に詰め込まれた杉の葉や蕎麦などから盛んに白い煙が立ち上り、炎を誘



写真18 トンド



写真19 祭壇とトンド

発してトンドは燃え上がってゆく。時折銃声のような音が谷中に響き渡るが、竹の節が熱せられて破裂した音である。(写真21)

興味深かったのはゴシンボクが焦げ折れてどちらの方向に倒れるかで豊作を占う場面があったことである。細竹の先を割ってつきたての小さな餅を挟み、大きな焚火となったトンドにかざして焼く。みな、煙を浴びて全身スボリながらその場で焼き餅を食べると、作業小屋へと下っていった。(写真22)



写真20 玉串拝礼



写真21 トンドの焼き上げ

ゴシンボク以外の四本の竹は、燃えるのを待つこともなく、焚火場から遠ざけられて燃やされつくすことはなかった。何かに使用されるのか、尋ね忘れたことが悔やまれる。

作業小屋は、ぜんざいとバーベキューと酒盛りの天国と化していた。婦人部の方々がぜんざいをどんどんご馳走してくれる。つきたての丸餅、準備されたイノシシ肉（山鯨）、鰻や沖イワシ、鮎を焼かれては次々と運んできて下さる。自家製の漬物や梅干、そして番茶。

直会の雰囲気も、心遣いも、いただいた料理も全てが忘れられない最高の体験となった。（写真23、写真24、写真25）

一つ寂しかったことは、日曜日ではあるが、参加者に子供や若者の姿が見えなかったことだ。冠会館で見せてもらった昔のトンド祭りの写真には、祭半纏を羽織って樽太鼓を叩いたり、焼き上げの過程を手伝っている沢山の小学生男女らしい姿が見て取れた。（写真26）

五十猛のグロでも、かつては子供たちに活躍の場が大いに与えられていた行事であった



写真22 餅を焼く



写真23 ぜんざいから始まる直会  
(撮影：上原美奈子)



写真24 直会の御馳走（撮影：上原美奈子）



写真25 猪肉、沖イワシ、二匹の鮎（江の川産）、  
漬物、番茶、日本酒



写真 26 冠会館所蔵の写真より

のに、現在は少子化の影響もあって、グロの行事に子供たちが加わることはない。歳徳神の恵みを一番得たいであろう主体がその場にいないことは、何を意味しているのか。しかもコロナ禍において、一年も休まずにこの集落ではトンド祭りを続けてきたにも拘らず、今後の冠地区の未来がかかった問題の根は深刻であり、政策をもって解決すべき範疇にあると強く思った。

### おわりに

本稿では、五十猛のグロを多角的にとらえるための所見を、歳徳神の存在と所在、再生儀礼としてのお籠り機能から見た仮屋の構造、そして歳徳祭の共通点と特異点を、大田市で散見される三事例の中に見ようとした。

どこの歳徳祭もトンドの組み立て準備、組み立て、儀礼、解体、焚き上げ過程を、小正月には必ず行ってきた年中行事として、開催地共同体において最も重要な節目の一つとして、愛情と使命感をもって粛々と努めてきたからこそ現在があることが、今更ながらよくわかった。

変わる世相に翻弄されながらも、減んでも復活し、中止されても再開を目論まれる、歳徳祭を必要とする価値観こそが、行事を主催する人たち共通の信仰なのであることがわかった。

正月飾りやトンドをはじめとする一過性（期間限定）の聖呪物に対する信仰、神道儀礼形式の採用による信仰対象の可視化など、歳徳神信仰を構成する複合的な要素が、どの事例からも見てとれた。

今日の最先端の思考と行動で活動している若き大学生たちでさえ、歳神・正月神が去っ

た後の抜け殻に過ぎない正月飾りを、「燃えるゴミとして処分するのは憚られる」と授業アンケートで多数が回答していた。

そうさせる何かこそが、祖先の魂をルーツとする歳徳神の本質であり霊験なのではなかろうか。不可視で実体が明瞭でない歳徳神を可視化するために、人々は、鏡餅やトンド、グロなどを、ハレの場の有形の象徴物として、不断の努力と義務感をもって作り壊してきた。

その思考と行動の源泉が、最も身近な出自をもち、節目節目に来訪して祝福の力を与えて見守ってくれる祖霊神としての歳徳神に対する信仰であると私は思うのである。

そして、歳徳神信仰（先祖信仰）こそ、日本人にとって心身の深層を潤す源流にあたるに違いない。

これまで度重なる調査の中でお世話になった大田市の皆さまに厚く御礼申し上げ、2024年に復活が予告されている五十猛のグロにおいて、この考察を深めてゆく所存である。

#### 注

- 1) 大田市総人口は32707人、五十猛町は1201人。大田市HP「令和5年町別人口」より
- 2) 白石・酒井105頁。
- 3) 五来123-124頁。
- 4) 広戸・矢富「ぐろ」201頁。
- 5) 邇摩郡（にまぐん）仁万町（にまちょう）と、東の宅野村（たくの）、南の大国村（おおくに）、西の馬路村（まじ）が1954年に合併した際に、仁摩町という地名ができた。宅野は五十猛の西隣の漁村である。
- 6) 大田市観光協会に所属し、大田在住の大住かな子氏が、大国まちづくりセンターと大田市役所に問い合わせ、最新の統計数字を調べ教えて下さった。感謝である。
- 7) 村山、91-92頁。
- 8) 村山、92頁。

#### 参考資料・引用文献目録

- 五来重（1979）『続・仏教と民俗』角川選書  
白石昭臣・酒井董美（2000）『鳥根の冠婚葬祭』ワン・ライン  
広戸惇・矢富熊一郎（編）（1963）『鳥根県方言辞典』鳥根県方言学会  
村山和之（2021）「グロ・ノート 一鳥根県大田市五十猛町の小正月行事「五十猛のグロ」を記述する試み一」『政策文化総合研究所年報 第24号』中央大学、69-96頁。